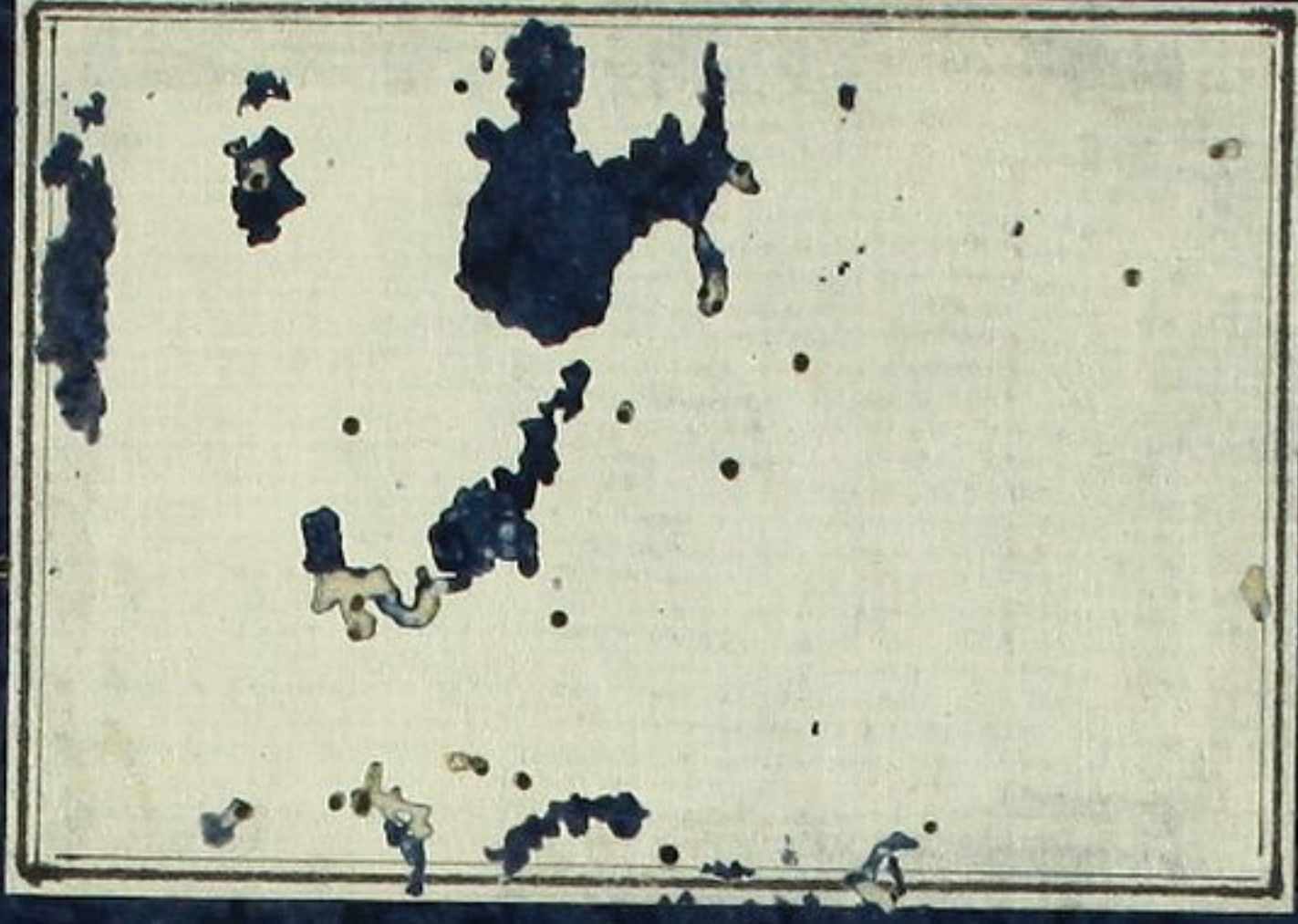
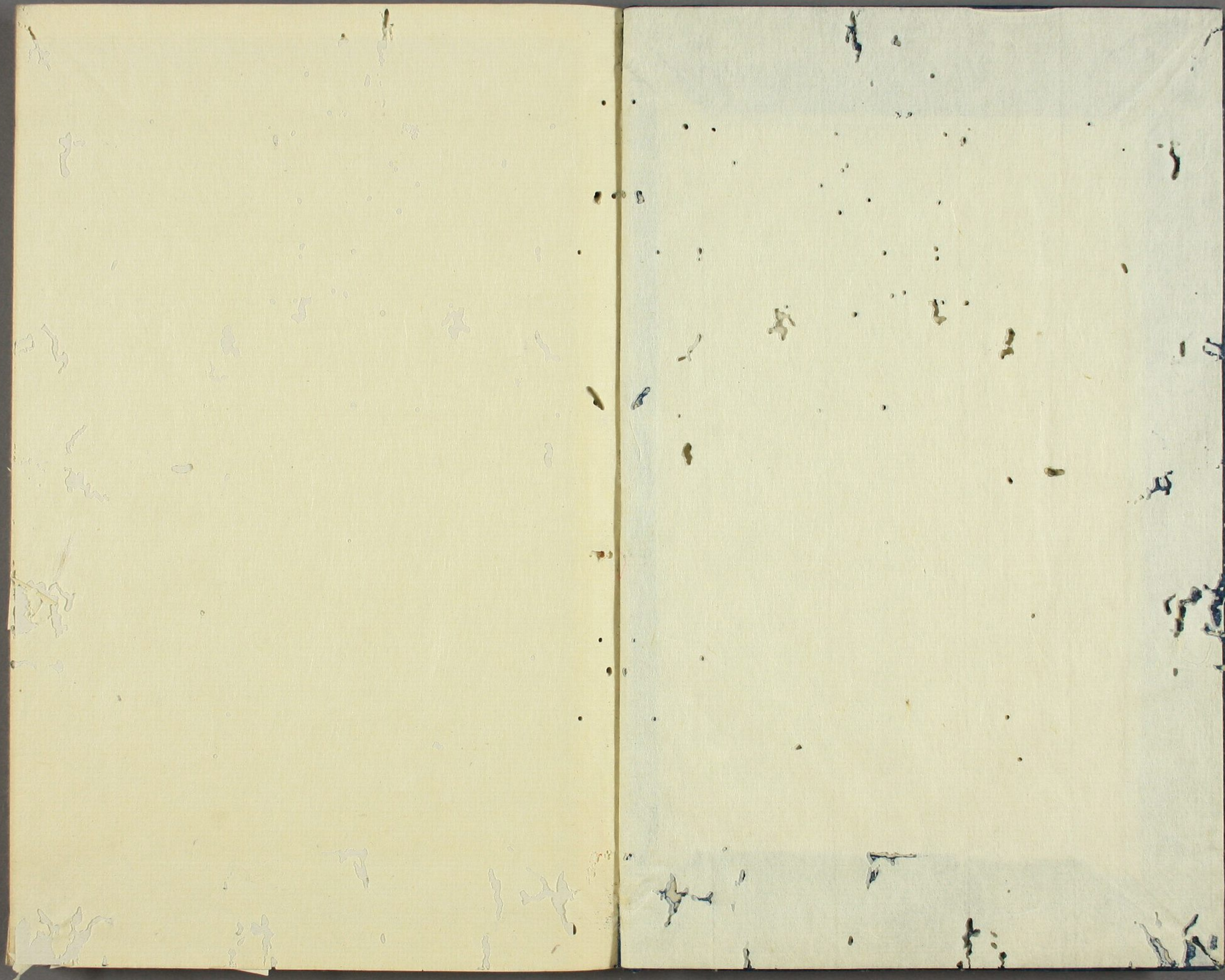




此珮紫再行  
地





卯曜女庫

八月廿二日甲子あり日いとよしこよひ 大和  
宗像多岐をすつりなるまきの家ふのへうき  
づほもせざりつる女急を云てふときいせりし  
祈きどもをらぬて又おねんごろあり産業とル  
ふらへり来れり内社神宮はざり六月いかに  
まで 宗像まよふべき幣代を授けりりまじよ  
き便をえてなむとす言ふ時、色乃はうへりて  
夕さかり来りともくよののころいす

ホ之日こまよしねいま一草ふのこせりし宿こ  
の頃まうてしるはきいふかり急初てよき程

ありこの日三日と云はしき病の行ずし  
よつきて疫病送するをていとらまびすし  
十四日朝地ある厳島の社はやすらでり終よりを  
昆布山よいつりて 宇保津の祀るつら  
するはる赤中つしまることとされていとこ  
あし終ら候てゑふどひろよおる言ふ時を  
人こそていとがは若どもありうへうてと終  
小言ふる守永より家より七月十六日出のふと  
二人よりおこせしるありあづいをきるこのた  
ゆりもていと終り

十五日寧ろのり終りあり終ら小豆飯あど  
めて終り終りこのちど天下の形勢いと  
うとさるふつきてむうつくとして栗すすふ  
る言時のををこくむをこてやうくむをやるの  
こあり  
おこの早れり雨も一ぱくふる資陽もオ一カよ  
り小倉すものしとくふくへるときあ終どもは  
上たしやうあしげ北が近ねをきいすいと併し  
きふ大梅る七月の豊れ終りよしと終ら  
いまいぬのことどもふ終るこの色ハルふ

よりふぐく神送り日 旅ひ致とすくくさりさす  
うふをき聞ふ程バこせ

す七るりふより大崎のふりまうていまいめ  
蔵うふり風雨いこくさこぎいりやうくお資陽い  
わんよりへへす

たいつこまよし大幸神津をまのよべきよしを  
とらまよくふとぞ 大津をまよめとてこ地  
の法舟をぬこまゆり姿陽りふうへせり

廿九日 簾葉ハ小倉よここりて夕さりらる大  
海ふか地木へ福永おと云のまうてほをこ

す

二十日 夕さりや風ふく中川茶と云のまうて  
れバこよい資奥る味人へ申報茶の許ふ取すて  
のすま味屋物より視をま送り

九月 弱々天いどぐうありらふハ辺は入の茶  
まありらわハ名石の味床まておつりまる資陽  
を伴いて筋を渡より 申は島を遠ふあこま

むとて出わく大平社を長住山をめぐりへる  
さハ新地ある蔵島社をすつづさてこのとき不  
たふ出とつべし思ひぬるふあつら程バこが

六神のほあとりをさるるふんぬなるしいと  
たしきるふてえもささるおどさむさへぞ出牛  
程うらるあして神のこむよはいろくあはれと  
えうふはーおーいあさーらすー  
へ日さすきーいーおお阿すぶーやぶがめてく  
くさむおのあーうとこよひあばうまーをふる  
のあよえさせたり

二日こまいとよー夕さり姿奥に寝る人うへう  
早る若るよの朝をたくり来れうらまはくこと  
さおくか

三日早水んふいものうくをさふ出さむの  
くまーあうり程ばいとああし夕さり若<sup>トモ</sup>楯曹格  
来りて門ふ入る若るも終る来れり  
四日雨ーぱー降る姿奥に清未よまりて申はむ  
うり帰はり若る曹格お来りてあのをうく楯  
も齊枝山亭さしてハ稻乃を記若園記ども  
五月若るよりをとくい送れる位ゆるをこ  
てえる若地の厳島社の速鞠神の若和布を  
知はるルふも保のうく若田と云ものより山流  
舞月の身をいせ危してもへり



む子のあらねくおとよとして昔乃がみをいさめ  
たり水もて河孫院まへしるる無山ハ嘴まもを  
しめてまうでなるる程あり山をこえて任吉荒  
魂祓祓まあうづこてまて姿陽葎乃、う崎の人と  
劉義をさくきてあごりをしむこよひハ清末よ  
ちやう

十日七時より岡部渡向を舟をきて通るよ  
きいて彼らお下れむといとつきあしとて十月  
より水崎の渡をさり上りせり所ふいづ  
ふ本よりいらごふて小部ある小井流系のもと

こえく

十一日午時よりうごよておちよ来る例の市川  
をながりありう木了鞆よしをりるおを友  
芳樹も京の竹を信をながりけい米程うとて  
出来る三田庵ある飯田セやなりより松亭して  
くさくのたくり物よりこよひ大い海をすしむ  
し程ハえのおごし程ハまごども人こよすくめし程  
ていこう教をふらせり

十二日一ときよりを友松亭の人こ来りて大子も  
のうよりする鞆ハ風をありとて出来るす標は



穢原お辯格考ふどじめてくるこよひも芳梅  
杉亭ふと大子留まかり

十二日ルル原田お行べうりつるをわの多く出  
くるのみてえやらずありり控バ中米をさきま  
つらハする鞆を考来りて大いもの控る足御同  
おの人とも来終り因幡人る御左原生をより九  
日ふをて来まするををきま一つべきいりありり  
控バハ田を記すかり御同とを信り決しぬまきをす  
文を阿とくたの人こ又後信おさし一も文つら  
いすりふ出をふハにをしりりぬへうりしをさ

さるおても神のこむといしたるしまふのうこ  
千世のあうまの内よりとさ出で新まの松の  
うけづのどルき

十四日三田尻ある田中榮八は隣来る女人を取  
ふいよて矢地もむる戸田ある山田おで光定迎  
ふ来控り君は姫神社よあうづせつはすやまら  
ん原田　　うりむる山田おを頼もすふ来りて大  
こわのうこりすおふりてうへ控り

十五日屏風まうくを頼迎も来りり控ハ光定を  
も伴ひて山田うりゆく夕さり控り社の山祭を

かりに程バ 石上 宗像大社をまつりま  
るさハ中保家の十三日の祀子をもえせず何  
うしあバとあふりふまらうまらるあう神田牛  
市家の祀祭をもつらうまらるる保の如くも  
神よむゆくこまつらああん何りらるこよひハ  
しが大社をす斎なるおるせまらるるいしては金  
阿う中村免ちあも来りて扱ふらてうへる  
十らる武社の後何らく山田梧山を来りて程ハ  
もいめて進ふけ人ハ十ハあり日る母ハ十六日  
ておハしやすをも見やうてりて思出るる多ら

う  
しが母も千せよいおせとを親ふを阿あハ  
て地の祀らうて後何の誨せあす  
十七日山田梧山が峠 の為お海嶽園の額を  
らく

大君の弟のさるの矛大刀を山田の海嶽にえあ  
らうしつし申の下うもやをん系田けふらへる  
まし額あど各はへり原田を秋が若と年定と改め  
て又臨海園もてこよひ 伊勢大正宗像の祀と  
をまつりまらるいよの祭長太公より送れる速吸

口め林と習付ふは後ふる梓崎社とて大伴稔手  
亮連の跡もふはりる母あふく終たる風林を  
もまらんや神りるあもすべていと秘人ごろお  
てむゆくままつりおなむ  
家もてもいつくおとて旅もてもなふるま  
きりぞたうへざりる  
十八日よぶより日本直轄傍大ら来りりよが  
ふるへき  
神風もふくべくありぬて地のいるく方あき  
あもてしと社に祝

て自らのいせのまのあやしろ天ふる神り、終  
おあひしてや村善右五郎来終りものうきあどす  
まし疑より鴨一おを送終りよべ福田おし物かぬ  
ぎつるをば梅の額をうくやよひ神あり雨いと  
う降る

十九日そ終りよ一より終りて都は都馬繁島茶  
る市杵島社お詣んのあくまありしと出  
ゆく京田年交父子と山田を頼きて川に若ども  
あり奉りよ出て福川ある位後をえう終りよ  
よのりてしとる凡一と余も有ぬべし漸く島去

うらぬるをどやとぐるしんいひありし  
ども海西の晴て富田福川の阿しりぞいしう時  
しりる社よぬぐくわどありを清くよ  
いれておといとすぐくし祝詞をて行厨を  
おしきり程よりこのころしと行めぐる事  
といありぬ島回と平余も有ぬべし大なる巖を  
あてたいめるが如くして舟をやすべき所あり  
ぬ山前僅ふ半所ばかりある後のとゆすて平く  
うある陸地ありねるうせしるの山岩從身之水ある  
於てまよお境といこのるありり安藝の巖

島大外流び糸より移るせぬおは之田瓦の向島と  
こことい丈とやどりの水跡と云りおのこや  
ろのし有て人家一たお阿しざしり程バセ中  
のどつらひしきるいあくてこお阿りてい家  
もあはするしむろいあるよ祿のちいし所まき  
ばあるべしさて有べきとらぬバ脈を出して蛙  
島 島と認めぐる 島岩島の沖の方おちるう  
んまにさるいうふしり社請のちどありて  
まよくぬきて追風さへ出て津ふむのふたより  
よりい思ふお任せこゆるをめては恵おめり

と人こ云阿一り福川の仲りて鶴の御ひくをえ  
て阿一りしれどお時こてう一りもえぬるハお款お  
るるおどおりりし

春日富田より信濃郡赤松崎をへりおど来る中  
村をたつても来りて鶴をこへりよ本も莊より  
来りておふハ六せ人の来りていとがく一常  
おハ地の中の人あるおしおてくさりたる鹿肥  
学おめらせるがさてくうるさき事ありりる是  
頼よりきりお島よて之つる手お心を送れり  
是一日中村 来りて左家又梅本の也身こふ

中村をたつがおよのふうお思ふおくさるべし  
や云この身をくきそをハせり夕さり幸魂を説  
殊の山ををしるしなるらふハ是也島記々々  
是二日妹妹松記々々富田あるはは ありん  
日事しやあべしや夜とい来る山田来りて  
阿すの志おをしむ  
亦之口て幸あり山田納中村をたつ所お来るが原  
田をきて富田おむるは原はよある阿よりいと  
う阿へししへり原田父子山田も共は送来りて  
くるこよし原風おとら

〇  
11

市田の長門子原姓ある枝村某よりありのりき  
ぬいてんやとしてそふ某姓なりも乃多く出て是よ  
う出とつ四熊氏の面像を五年あふと雪三合律と  
号を授るまことい國幸神と改て其文をうき棕  
尾山阿と一つ菊田より人に送る其ハ幡まの川  
前ふ燈臺もふむ其形をうりおとて乃原山田原  
田の人ともを石のハ幡まをまるとして人  
ふふ姓をを園よつと 某の宗ふとめし姓て  
こふひとの多くうき阿こふ  
本五日薩平宰れ度の通るせのふるといと芳ぶ

ハく相見えし魚よ阿ふ夕さり岩ふふる二井深  
丈がりの者なりつるふこの次世中さとしがーありル  
程バハ戸田の人の信るをゆるされずとて徳文  
よ送る姓て新湊ふむる或る阿をと云ふて阿ふ  
どもをうりして別姓をしむ水をうりて文略よと  
ころ

其ころあうま略よつと本宮実人宮大え宮ふ訪  
まかりつ宗像の遠拜をもつとま行り七門人  
大賀茂助成史々の仔細信を侍ひたるふ阿へり  
りしバ口ぬすて度信おむる未田産花種正據あり

○

二二

あるそこのよりあるをいけてこすいいたもいぬ  
るふたねる

才七の末田がかりゆきり控バ岡田はと云人柳の  
あはれと云ひをもと本りて序文をこふはた控り若  
せる本末を解しをもとくるものうきて教ふくる  
までこいふうい控り

才七の人このいふよりて後詞をよききらせつ  
夕さり岡田はふ送る北と尾及水よ集る川はふ  
て教も何す

才九の川阿しうりり控バ音戸ふゆるこいハ

大政大水のあはれさふさくせぬ一るこそ山を  
ぬきて通さ控し所ありゆるものういとゆらし  
うたちえても身をよしてすれ雪をふぐさめま  
る

三十のいといよりりり控バゆふさり尾及おつ  
く船おとまる林尾貨物を訪て何ふ

十月節の井尾よて空ののくくふいよ法海を  
先ふ走くせて空より福ふおむる松中原を出入  
へとりおふらり控バ松中長系を止田仁一師  
西善寺おど来りて福をけくむ教ふううへ控

むいよは海酔て大ふき痛き多うう  
二日いよは海に成丈小送くせて西善寺小きハ  
す夕さり誠之飯小ゆくゆりよりの阿くよし於  
梨  
三日としめて海酔すまときうしりころ其つ  
きを講ずる子ありき成丈美彦をも伴ふ登ハ祝  
詞歌り日本紀あり松本二田ハ花よて酒をいと  
くのこしてえものせず  
四月ハ不断ふても海すべうりしをいふハ外小  
るあるよしあてやまむ誠之飯ハ係のゆく

五日宋を新田にゆきて足崎を友友の良を重衣  
上門大黒を重衣所居井長也をどのためて万葉  
と祝詞とをよそとむ歌ふりて松本生うり終  
ハきく小誠之飯のうくおハいさしくねとむル  
しき阿うとぞさるふてもむうきこと娘くや  
六日天をよし五島来るこすひ松本お来りて酒  
ものむ講えハ係のゆし  
七日上田仁一師のすとし原飯子招くるのこし  
の饗ハ夕く松本あてくふくふハ父の祭るあ  
うり終ハ殊よつしむ



八日倉田を某の舟と小舟をうけとりとて招く  
行てを飯とくべとりこよひおきあうり行ハ大  
舟を以て舟をより送れる舟泊を参る中島辰よハ  
大契小伴ハせて念田所よまうでしむいよ傍小  
走のめよ来終り

九日孫子をよこして津武天宮に祀小授す新井繁  
其の乞もあうりてあうりふハ飯よてのろく夕  
さり以て舟を舟より舟着をのハ行るを人  
おもとしてねをうりゆく新井毒島二人と黒物と  
あうり田仁一郎いよ傍小を伴

十日てまよし例の孫子を圍る人々多く来りて  
煩ハハ一きも云ばうりあし

十一日大風ふりり念田所よの人ともいふハ  
へるまどくこえり行ばとがとふ三好芝蔴がり  
行て字像大舟をまうるにがつりうまもる舟をも  
以てひまうてこころよしきう

十二日誠之館よりふハのろく夕さう海へ  
も行し我ども人々休む

十三日名谷何りしのもどふ葉己よゆく予をも  
てあすとして人々多く行厨をたつさへ行て名珠

をいしむ書業祝

村ことお必あしるきとりのをきいとおきせよめ  
つべうりりりこよひ正田お行く  
十四のりふい人このをへるもの多くうく終よ  
ひ多くつとひいていとどづくハ一彦井小をり子  
松井村おふど来うて酒肴をせせり新秋の六十  
一かゝるをさしめ七多多く出来るこよひ誠之誠  
よて例をつぐる大賀いよ僧こてより列るべく  
ちり

十五の終ぶりのうく彦井おを門より招く終

て終より招きよて休るひうへる高を門十をん  
ふど来うて別をのりそりおふりて人こくへる  
家よきいすべきものどもしためて例の村を  
おふりてい

十六のりふも協のすのうくはは村おふ石井武  
重武のすとおゆく村田上田おを三好池田作  
を彦彦井小右工門送ういたる石井おても人に  
多くあつありてす終おふおすせて力の多くを  
阿ふるすふりきこ好重をつ玩天地新掌玩  
と終天緯地の印をもお来るこよひハ大皇いよ

傍二くおさかりふバむのとりふてうたゝとる  
十七日つとめて折四所五京来るうごめて空圖  
まで送る程て夕さかり玉しまふるふ幸中京の龍  
うりお待よろこびあるしに  
十八日りふいものうく夕さかり画入る博本カ  
程ハ大ふものうとけに程き人どもあつま  
りて何く程のもののうとけはる多うり枕碧様  
のもうし程とくれに程まむ  
十九日石博うためふもこうこまむる博又耕やふ  
と来る幸日程と云を足出て

天てし以程のむうりの阿まねきおきこころ  
うけをうへに作らむうけるふもおみすべきお  
ハおかり程ども家よりうけくおもものたふ  
ハすていといとうまいらいだく人の思ふむら  
むうくして妻子の程ことりことおまつをもとへ  
おまご夢人のとむるおまうするむ程の  
いへまふもゆとくお阿くバ旅のう程むふし  
くたくる日あるあらめ  
十八日りふハ申さあうり程ハ字像大程を夕さかり  
おまをる中京利をうり程のうめお程をまう

る赤松坂越浦康人瓦板次郎牛子玉一主人地以  
を仙治郎が足ありとぞ江戸新地小村集小水を  
出する人あるよしして訪りし  
亦一口能とつ吉徳はまよまうして一岡ふまをぬる  
亦二口片とより新水のりて赤松坂小村ありこの  
所よあつた

亦この娘後灰を桶二のむとふ訪れるふ赤松二  
仰ふと秋と女氏をよびよきいせりこよひ取ふ  
くるよでゆきのよかり

亦四口雪ふるあ氏神二ふど地とさのししてたよ

酒を以てむ画人聚いし年る赤松ふる良海町の  
田中記をまどめてこるこの人よりのうし一をう  
べくるよいりたう

亦五のあ氏をま肉めてそ方ある新本改むるを  
とよまのせぬる

亦六のりふしむしてとめし終むしむ阿く妻日  
をくく集集得月様よせぬる

亦七の新あまてこるなふる井海よをよる天八十  
指こめ

一してよたれしいとえとほい十鶴しのなるよこ



ふゆく

じつしやもせむこころのさかぬふてよことお  
りふりせるふりる母のうしせぬつるかのを  
こころをまのて家を出つてふじり云べうらす  
たのこ人の人どもと重節をまおゆまてハ情ふ  
よあうでハ情のあふましをそらるる空寂がり  
あはる人こ多くあつたのて凡九年あまのまじり  
るるもみちうしおぬ也

之日ルふれよのるべうかりつるを風あきあはし  
づうへふもの多くルせり控ばしこある例の人

こ多くつどひて謀はむゆゑるあうルリ仁井  
よりかちうえまよとして牛るそ控はつきても母  
のゆむたしハうりまわしせていとあむ多へが  
だきさ控むをまふ必するべくちてむをあら  
さいむもじうあきとぞいありや人こ甚うああとす  
四日人こ送こ来るこは能とうけて札幌よりス  
坂よこするはむむりりもやあぬんざこハも  
う又ともおぬ也

五日初旬はむむるけころる御もぼよよあふつ  
きまはるるあふぬのさるる目よりあふあて



のめづりしとする播磨風土記をみる夕さり和  
田流能がりつくりふハ終々の山登りて又直寄  
いとめざくしき中ありりまバ大いむをあげさ  
む又大坂までさつるも中なる人の言ひし  
ふもてハさしも阿さうり甲もとぶり上をそ  
しうあるむむおちえふり控バこゆいこ登五  
日ゆりのむづういそドのてとけ枕ううあふ  
するふりりれ  
九日大社より舟を丸より送控るののどもいふ  
ふきいすべくしとむ西村むうりるふやん

を登りて五月ふ別控多う一後の事どもうる  
和田より行うへりて梅戸より送控る若高をそく  
ハせてしるるさつもの邸あて是枝氏の事をと  
ひるふいしむご京あハやとすとが  
十日 宗像大社の山前あて山祭つううなる  
中山ぬ村を招きてお金の事みきつしさして  
ふハ出をより来うせのへるを以り地誌社又之  
臨社の山雲の山ゆふつきて 尾形村築雨大  
神をも辨おいつきをうるをへて中山とくまふ  
石砌中納工殿の山新ふとどめてまうてまう



多ふどつらうちりり程は海邊をうこばく  
ふとまのせとりさいとくくしく孕きほりど  
もふあむ

十一日中山を待とりふとも来りさうり程は  
あてのこしちく出せのわき原と道より送れる  
むも和田より出すべく云ちぎりて立出つ雪い  
とうほすこめり色は山の中おたひまする光  
をさとふしひきこえてくう阿うす

十二日雪降る志賀山城より大はふ出ぬめて  
とる部ふある将軍家下の山ありて色

大納言殿ハルふ二条大納言殿ハ阿す立せぬふ  
よしおて乃中らくがし

十三日いせつ標本おいたりてあるいとさう  
り程でも日いとよ

十四日雨もあひありり程どもつとめて多つは  
ある川右田政明ううとひて榊田おある

十五日とく榊田を立出るるおえ川あびん  
来りておのく款ハぬおるういまりりり  
もをくそへてむいとほくしえ川までこそぎ  
をしつとほまわりて  
度守家おまうで山乃

よりハ之徳をいざあひて原船がうつくハ因常  
陸友田才物あど味うて扱ふルて々へる中京も  
十一月こゝふあき十二日秋津社に出發して已  
たりりるといふ奇事殿祝

て地とうこゝせしうぬいそこり君々ため  
しお云くへりりル船ふ石竹内和田の人こふ文  
きハ因友田才物をきふ出さつへきあよりて船  
り  
十六日ハ羽光徳を伴うて 度會をふし信をり  
川を渡るの詠りそ終りものふしりつと社社よ

あうて船者よはる友田宰福ふ竹内重任う筑後  
国大庭ふる許ふ文をハす若柳が足とこりといへ  
る口本紀の巻本柳川候の茂出あ日よし六人部  
是書よきりるあしよ字しぬハハハやと及のそ  
めりしりあきぬきを云送禮るあうルり  
十七日船をうけて三河必を良ある一巻と云ふ  
はるこの巴橋豆部船り  
十八日せのルしきあしうル船ともしいして船  
を出しとりりるおりしして雨をりま峰と云ふ  
船ハてすそと云しきふいもくうと船しこの旅

みして、はらばらりの若しこい、あらず、おん  
十九日未は、はらり、若田、まゑ、くぬ、田、野、が、り、と、ぶ  
く、ひ、る、み、飯、田、は、は、ら、り、井、よ、う、来、り、共、て、廣、岩  
こ、水、あ、ど、し、す、も、す、か、う、う、ま、た  
十日、う、は、若、野、ま、の、よ、来、り、ら、る、か、し、も、て、停、賢、を  
彌、ハ、と、い、あ、ま、と、ぶ、ら、へ、う、飯、田、と、云、ひ、う、は、と、云  
て、云、合、す、と、い、あ、く、二、人、と、も、ま、阿、ふ、井、よ、り、来、れ  
る、が、自、然、に、神、の、水、を、よ、来、れ、る、よ、あ、り、て、く、し、を  
あ、る、よ、あ、り、こ、よ、ひ、ハ、二、人、共、に、お、田、野、ら、り、あ、る  
ら、ハ、ハ、も、の、多、く、う、ま、つ

十日、神、の、水、供、も、て、お、田、野、に、飯、田、の、三、人、を  
先、を、と、し、て、阿、ふ、井、よ、む、る、地、徳、神、社、も、ら、あ、は、は  
よ、め、で、く、う、あ、く、く、の、よ、よ、し、た、う、る、お、の、花、が  
ら、ふ、の、ま、こ、う、い、と、く、阿、や、し、ま、り、た、う、り、た、と、て  
人、こ、お、し、さ、こ、い、ま、は、も、や、が、て、神、の、水、を、あ、り、や、こ  
と、し、ハ、旅、の、う、う、お、て、を、共、し、つ、る、も、う、ま、り、お、か  
ま、一、り、し、を、ら、く、る、の、お、ゆ、く、ふ、つ、き、て、も、さ、る、べ  
き、ゆ、も、う、い、い、ど、も、あ、ま、り、と、も、あ、ん、思、合、せ、し、た  
は、る、う、は、若、野、が、あ、り、し、お、あ、る、人、こ、多、く、阿、り、あ、り  
て、は、び、を、の、べ、と、り、ま、

廿二日あすは正三のよーあり。此社のあけし  
きりぬくお田畑と二人飯田舎人のすこあうつ  
うて祝詞あどくくお焼い人こと共お正三の  
あうましをいこいぬあどむいさきよらしてさ  
くおいとあまし

下なるりふいかりありとしては供つらうも  
！あまの正三太社のいぶ宗像之社のいぶを  
飯田舎人あさつくこよい諏訪社を役殿として  
とりめて 地蔵の社あうつーなる四月おい  
あまのあうー 内まのいおと合せて四所あり

き鹿島香取のいああありて予あうでいやこ  
いんとしてかお綱後が化けるわを役わ非体と  
して六所をあうつーなるさ程ど吉田田ハ拍軍  
家のいいこいてさるよーふてすべこの祿を  
とめいれたかりけいハ役式ハ本年の三月と定  
めて役の正三のあまあうり程ども人多くつど  
ひていとよぎつーきいあうつーあう非のい  
こてああもさこていけいとかりぬめよろづあ  
あけひてめでたーあどえんも文あうるいこ  
うはがかりあう

十四日予ての村々井々社社内其の地味体  
玉たまへるふりりて千原を造るふこひて地誌  
社の地味と其ふ地味つらうなれるをりふ人  
道ふ本るふましくしく地味幸ふるせかハ一まし  
ていとめでたしうびハ飯田ぐり宿るさるみて  
も地味をふるふこしをりていとさざしりり  
り地味山しをめして降るをうこせしてどがつ  
うりする地味と其ふ地味を奏す  
亦五日りふハ地誌社の地味又ハ五年あふと  
永七年の地震の記をうここめひ人こをあつめ

て地誌社の地味をうこきく人多りりりりり  
其いふふこの地誌社の地味と其まはくむとむ  
さして地誌社  
亦六日地誌社ふましくて阿井を出とつ夜中  
よ地味さうふ取を出して送り候むる者  
こゆひるふる  
廿七日雨ふるて地味川ふらりて秋の雨ハ地  
り金さしとする僕も是をいとめたりり地味  
坂より人地味とす  
亦ハ地味ハ地誌社ありのあやとむとて候むとす

江尾もゑる

廿九日辰はまゑる不二の山いとよく晴こと乾  
さ程と風いとまじし

三十日辰とくをて湯をふる初任九花がり訪ル  
るみしひてとどめらるすとめよすよておのり  
まじる中ふ

て地の祥のこぢをよまひでう人ハまじりおを  
へりりる

十二月朝の初任九花があま内よてお授ふ大任部  
片園ある大はお才をのりとを訪ふこハ初任が

見形うル世に才物と云々の皇學よこくもざ  
しゑる人よて教ふくるまじりのがし程り

二日いとまじりふハ程谷よゑる家よりまじり茶  
どか考個後が麻布の家然地までお花中糸を伴

ひてまじりまじりふふへりつらざりまむ  
おのがあやまおちて子ともおいとらさ目も  
こせとりる

三日とまじりつとめて出とつ如考個後がうを  
すりとするハまはじらうもやまじりむニまよて發  
おじゆいて家まらへりつらまじりの待まらこべ

る事せしことへふくむ事  
宗像大社をえ  
りめ所この山雲ののハ彼小社極子をさめを  
りこの家みる小梅ハ人々といと何〜所もよ  
くも犯うは控バ返て家所をうへむ阿らあしを  
よよりて何るも事そきたるは予ありう〜たの  
程と年ハ  
伊勢太神女おふた〜びああつ  
うとく  
出で大社おハハやぬ乾の九の二  
剣を冥相考純とあふさじ竹中しくぎくの山雲  
あつをぬハハ  
五龍大社はハ小刀を納り  
りるるお御霊をよとて程とがはよ送り牛乳

るをえよとてうけをり  
宗像大社ありハいと  
もく止るあき神宮をりあき〜授けぬハりてう  
程〜ともさ〜ともた〜ともさ〜あたと〜へあ  
さゆりあて天下は家ハ多くを程ともいとらバ  
ありの山雲物ハ犯る事あて子孫の幸福云〜  
次めて〜さゆりともあ〜又  
高千穂女  
の山ハ具ニ枝せ遠より得て薩平より供なりあど  
津の山恵ハハ〜ぎりあ〜さる〜う〜ふ大和  
よてハ城上郡宗像神社名神のす〜程カへるを  
外山村〜道て印て神を記〜この十一月ハ日

卯まうつ一の卯子まきには辰子てハ四月子内付  
所より始へる卯日ちをさめまゝに社を仁井不  
る社のをとよりまきべく子さうり又本せの家  
の宅跡ハ本より出で大社まててこくせのへる  
まこくより宗像神社をも令せて居所おいつき  
ましくめむるをもうりきを江お新共あてハ地  
法跡社を十一月廿二日お言ぬなるおど跡の川  
あめおもぬのためおもてお田ふ所田おお任せ  
ざるるまふくおむみるる能るふ又幸多りれば福  
も又多うはものよやまをく人を去年の十月より平

田臺とこころよろうざかりるるのまらるるをこ  
の二月廿二日お彼より交をとむて後お交ぬこ  
いとあうかりるるよや諸子の人こを我方おむ  
ルトとして兎手柏と云ふあぬえせてをつひか  
て人おをさうらうしめて妨げ凌ぐ人女姦謀をぬ  
してあしおふくこの予が平素の志をしるざる  
おまのまおむおハルうとき、災をもいへるかし  
を幸お彼が小人鄙劣の心をし控る人多くて後  
ハざうりるるが故おたますくぬるくして中不  
丸おの道おむうてハ一人おお彼お味方する曲



若きるるふきも此の由をうひとらへすくも  
さきゆもふふんさばれ六月廿六日あやむらん  
瀧はまのゆゆふゆつゝをけりるるふ彼  
が妨いさうも若くぬぐうゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゆあゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
どもあゝ又多故九りゆと云る曲若きりておの  
が才をあよとふ奪取とるづうへお大あるまづ  
るをさうりるるがためお四月よりこのごろお  
あうても家おはものゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝもゆゆ<sub>は思大</sub>あるあ田ほせり<sub>ニ</sub>送

うて妻子ともふや命をとつあぎるるるふるが  
さるふても此のゆきとめあやむるむを年流り  
たるコロリと云るあゝき病のためお多湖が家  
ふとりてはいと止るふきものゝゝゝゝゝゝゝゝ  
物と云のものをとめあよと死て刺へお十一月  
の志るふの家も花も焼うせてりりときりり  
たハ大ある家をたあての復ありら控バたの  
が僅あるものゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
の若くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゆふゝへるとハ云ふがらゆり終ありるるども

ふりたの程ハ夏より冬へけし必しを切めぐり  
歎息と云ずつとめてとづらふえとありらる財不  
りも程バ彼がいつはりをもてらすめとる類ふ  
程程バ我が思ひつしぬらバ彼が必大ふ殃災  
を程はよあしりくべきふありらし又今井原を  
と云ものより予が知る人あも程り程程とし  
と年の南より北へてせぬくりまてをきをとり  
ふ家をよりりて日しを美いをもとが物をとらちて  
わのしるるがうへふうこばくの念を欺りりて  
はナ月までこしふ在らるるやあうひあくして

費するありり程バ室らぎうをて一身の置所を  
くふうて外ふ逐出しるるありらしこころふさ  
まよいれり予がなどもをも持出てり程バ家よ  
うへりても著述ふらうつらあるも出来ずこ程  
又大あるとぎいひいと云べしさる不実のむくい  
りや父父コロりて亡せ父家十一月十四日お  
産てりるもふむれは之の殃災をバえとありり程  
ども予が流ハ天下ふらくるしるれくやれまで  
もとごろきとこりてめでときがうへふと年せ  
こごりて病とづしひらるふと父如友内友おど

のまといらうまみ家くまかうもるまくつ  
後後ふたひやす母命のことひ十六の月  
ふもくせのへ終どもは面さう志させてう  
ひしくたひしやす終ども天下小人の多り終ども  
大なるをゆるむものいとまあり世中ふ幸なき  
まはまふめども母子ともくあさうえてめで  
たき例ひ飛りりふる終ふつきてもけりをもいよ  
くこがきて天下の初家定のまは多くおしるし  
て世中ふ幸ふ終まきりふまむるるひふたのし  
阿那たかしとぞ

十二月九日

重胤云





二十貳葉

安政五戊午年四月朔日

嚴檀本主人

四十七

竹坑此系再行

地



